同一言語内における文字普及状況の差異について
—ポー・カレン語の事例—

加藤昌彦

1　はじめに

ビルマ (ミャンマー) やタイに住む少数民族カレン人の言語には何種類もの文字があり、そのうち特に、キリスト教スゴー・カレン文字、キリスト教ポー・カレン文字、仏教ポー・カレン文字の 3 種類は多かれ少なかれ出版物も出ていて、普及の度合いも小さくない。ところが一部の地域のカレン人の言語には、無文字に近い状態に置かれているものがある。現に、Cooke et al. (1976) はそのような地域のカレン語のために新しい表記法の提案を行っている。以下ではなぜこのような状況が生じることになったのか、特にポー・カレンの場合に的を絞って考えてみたいと思う。

2　カレン系諸言語の文字

カレン系諸言語は、シナ・チベット語族 (Sino-Tibetan) チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) に属する言語群である。多くが「目的語–動詞」型の言語であるチベット・ビルマ語派にあって、ほぼすべての言語が「主語–動詞–目的語」の基本語順を持つこの言語群は、東南アジア大陸部諸言語の言語接触の歴史を考える上で重要である。「主語–動詞–目的語」という語順はモン・クメール系あるいはタイ系言語との接触によって生じたと考えられている。新谷忠彦教授 (私信) によれば、カレン系諸言語には 40 種類以上の言語が存在するという。カレン系諸言語内部の系譜関係についての最新かつ最も信頼に足る説は Shintani (2003) に示されているので、そちらを参照されたい。これらカレン系の言語のうち、狭義のカレン語とされているのが、ビルマのカレン州、エーヤーワディー川 (イラワジ川) のデルタ地帯、タイ国西北部で話されるスゴー・カレン語 (Sgaw Karen) とポー・カレン語 (Pwo Karen) である。民族的にも、狭義の「カレン人」とされるのはスゴー・カレンとポー・カレンの二つである。これ以外に、ビルマのシャン州やモン州で話されるパオ語 (Pao)、カヤー州で話されるカヤー語 (Kayah。カレンニー語 Karenni とも言う)、カレン州北部からペグー管区北部にかけて話されるボエー・カレン語 (Bwe Karen) やゲーバー語 (Geba) やパクー語 (Paku)、カヤー州北部などで話さ

れるパダウン語 (Padaung) やゲーコー語 (Gekho) 等々がある。

カレン系諸言語には実に様々な文字が存在しており、大きく、モン・ビルマ文字系[*1] 、ラテン文字系および「鶏の足跡文字」に分けることができる。表 1 に主なものを掲げる。

表 1　カレン系言語の文字

モン・ビルマ文字系	ラテン文字系	“鶏の足跡文字”
キリスト教スゴー・カレン文字	ゲーバー文字	レーケー文字
キリスト教ポー・カレン文字	カヤー文字	スゴー・カレン神代文字
仏教ポー・カレン文字	その他	ミャインジーグー文字
仏教スゴー・カレン文字		
北方パオ文字		
南方パオ文字		
その他		

このうち普及度が高いのは、キリスト教スゴー・カレン文字、キリスト教ポー・カレン文字、仏教ポー・カレン文字の 3 種類である[*2] 。

キリスト教スゴー・カレン文字 (図 1 参照) は、1830 年代のはじめにアメリカ人バプティスト派宣教師の Wade によって考案された。モン・ビルマ文字を基礎に用いてはいるものの、母音や声調の表記法に斬新な工夫が見られる。例えば、母音の [ɛ] を表す記号としてはビルマ語の [ɛ] を表す記号である naukpyit をそのまま用いるが、[e] を表す記号としては、ビルマ語の [e] を表す記号 thawehto を用いずに、aukmyit と呼ばれる記号を用いている。この記号は字母 (すなわち子音字) の右下に置かれる小さな円形の記号であり、現代のビルマ文字においては下降する声調を表す[*3] 。アメリカのバプティスト派宣教師の Mason はこの文字を用いて 1850 年代にスゴー・カレン語の聖書を出版した。この文字の詳細については藪 (2001) を参照していただきたい。

[*1] 「モン＝ビルマ文字」という術語は藪司郎教授による造語である。藪 (2001b) を参照のこと。

[*2] 「キリスト教スゴー・カレン文字」「キリスト教ポー・カレン文字」「仏教ポー・カレン文字」という呼び名は筆者が便宜的に用いているものであり、定着した術語ではない。

[*3] ビルマ文字の thawehto は字母 (子音字) の左側に置かれる記号である。澤田英夫氏から、西洋人にとって違和感のある「母音字→子音字」の配列を避けることが、thawehto ではなく aukmyit を採用した理由のひとつではないかとのご指摘をいただいた。

キリスト教ポー・カレン文字 (図 2 参照) は、やはり Wade がキリスト教スゴー・カレン文字に基づいて 1840 年代頃に考案したものである。この文字は、子音字にラテン文字を使っているなどの点でキリスト教スゴー・カレン文字よりもさらに斬新であった (図 3 参照)。しかし、後にアメリカのバプティスト派宣教師 Brayton によって、おそらくは現地の人々に受け入れられやすくするために、モン・ビルマ文字に近い形に改められた。ポー・カレン語の聖書は Brayton の手によって 1880 年代に完成した。この文字の詳細については加藤 (2001a) を参照していただきたい。

仏教ポー・カレン文字 (図 4 参照) は、モン文字に基づいて作られたものであるが、その起源は多分に自然発生的である。カレン州のパアン (Pha-an) はモン人 (Mon) の古都タトン (Thahton) に近く、この周辺に住むポー・カレンの人々はモン人から仏教を受容し、その過程でモン文字を用いてポー・カレン語を表記する方法を編み出していった。パアン周辺にはこの文字で書かれた貝葉が大量に存在する (図 5 参照)。貝葉というのは、椰子の葉に鉄筆で文字を刻んだ文書のことである。Phon Myint (1975) によれば、彼が収集した 70 篇あまりの貝葉のうち最も古いものは、1851 年に書かれたとされる、モン語から翻訳された仏教説話である。伝説によればこの文字は 11 世紀頃には既に存在していたと言われる。しかし実際には、18 世紀末から 19 世紀前半にかけての時期に発生したと見てよいと思う。この文字の詳細については加藤 (2001b, 2004) を参照していただきたい。

以上 3 種類が普及度の高い文字である。これ以外の文字についても簡単に紹介しておく。

仏教スゴー・カレン文字 (図 6 参照) は、比較的最近になってカレン州の仏教徒スゴー・カレン人の間で使われるようになった文字である。スゴー・カレンの場合、キリスト教スゴー・カレン文字が小規模ではあるが以前から仏教徒にも普及していた。しかしもともとキリスト教の布教のために作られたという経緯があるために、この文字の使用を嫌うスゴー・カレン仏教徒もいた。このような状況の中で、仏教徒のためのスゴー・カレン文字を作ろうという動きが芽生えて考案されたのが仏教スゴー・カレン文字であると聞く。

パオ語の文字である北方パオ文字 (図 7 参照) は、シャン州のタウンジー (Taung-gyi) 周辺において、仏教ポー・カレン文字と同様に自然発生的に生じた文字であり、伝説上はやはり 11 世紀頃には存在していたとされるが、ビルマ文字に基づいていること以外は起源について詳しいことは分かっていない。タウンジー周辺の僧院にはこの文字で書かれた仏教文書がたくさん残されていると聞く。パオ人はビルマ南

部のモン州やカレン州にもたくさん住んでおり、言語的には北方のタウンジー周辺の方言とは少し異なる。南部の方言を書き表すために考案されたのが南方パオ文字 (図 8 参照) である。この文字は 1960 年代頃にモン州のアランタヤー (Alantaya) という町で考案された。

ゲーバー文字 (図 9 参照) は、ゲーバー語を書くために 1860 年代にイタリアのカトリック宣教師が考案したものである。カレン系言語の文字にはモン・ビルマ系の文字が多いが、この文字はラテン系文字である[*4] 。まだ聖書は出版されていないけれども、主にキリスト教に関する本や雑誌が出版されている。声調や子音の表記に不備があるが、ゲーバー人有志達の手によって徐々に改良されつつある。また、Solnit (1997) によれば、カヤー語にもカトリック宣教師によるラテン文字に基づいた表記法が存在するという。なお、Solnit (同上:304-308) は、ごく最近になって考案された Indic style のカヤー語の文字を紹介している。字体はモン・ビルマ文字の影響を受けているように見える。

上の表で「鶏の足跡文字」として分類したのは、カレン語には昔、鶏の足跡の形をした文字が存在したという伝説にちなむ字形を有するもので、筆者の知る限り、少なくとも 3 種類が存在する。ポー・カレン語東部方言を書くためのレーケー文字 (図 10 参照) は、カレン州のパアン郊外に本山があるレーケー教 (Leke) という、弥勒菩薩を信仰する宗教の信者が用いている文字である。この文字は 19 世紀のなかば頃に考案されたという。次に、ここでスゴー・カレン神代文字 (図 11 参照) と便宜的に呼んだものは、スゴー・カレン語を書く文字であるが、詳細についてはまったく不明である。もうひとつのミャインジーグー文字 (図 12 参照) は、反政府組織のカレン民族同盟 (KNU) から 1995 年に仏教徒カレンを率いて離脱し、ビルマ政府寄りの立場を取ることによって権勢をふるうようになったミャインジーグー僧正 (Myainggyingu Hsayadaw) が考案したという。スゴー・カレン語とポー・カレン語の両方を書くことができるという話も聞くが、未確認である。

---

*4 Antony Boys 氏のご教示により、筆者はラテン文字によるスゴー・カレン語の表記の存在をごく最近になって知った。この表記体系はチェンマイ周辺のカトリック系キリスト教徒の間で使われているという。当地のバプティスト系キリスト教徒は本稿で言う「キリスト教スゴー・カレン文字」を用いており、宗派によって使用文字が異なる例として興味深い。

3　ポー・カレン語における文字使用の状況

3.1　キリスト教ポー・カレン文字と仏教ポー・カレン文字

ポー・カレン語には大きく分けて 2 種類の方言がある。筆者はこれを西部方言と東部方言と呼んでいる。西部方言は、ビルマのエーヤーワディー川 (イラワジ川) のデルタ地帯周辺で話される方言で、パテイン (Pathein) を始めとする都市にかなりの話者人口がある。東部方言は、ビルマのカレン州やモン州およびタイの西北部で話される方言で、話者の多い都市にはカレン州の州都のパアン (Hpa-an) やコーカレイ (Kawkareik) やフラインボエ (Hlaingbwe) などがある。1993 年のビルマ政府の人口推計によればカレン人の人口は約 286 万人であり、このうちの半分近くはポー・カレンであると言われる。また Cooke et al. (1976) によれば、1960 年代後半のタイにおけるポー・カレン人口は 4 万人弱であった。Kato (1995) や加藤 (2002) で示したとおり西部方言と東部方言は相互理解が不可能であり、ビルマのカレン人達は両方言を別の言語と見なすことが多い。下に、西部方言に属するチョウンビョー (Kyonbyaw) 方言と東部方言に属するパアン方言の同じ意味を表す文例を挙げておく。

西部方言	jə	kə	lé	ʔànshà	jà	kòmûɪshàɪnní
	私	**(非現実)**	**行く**	**売る**	**魚**	**明日**

「明日私は魚を売りに行く」

東部方言	jə	mə	lì	ʔánchâ	já	kèkhó
	私	**(非現実)**	**行く**	**売る**	**魚**	**明日**

「明日私は魚を売りに行く」

ポー・カレン人の間で多く使われている文字には、先に述べたキリスト教ポー・カレン文字と仏教ポー・カレン文字がある。

キリスト教ポー・カレン文字はもともとカレン州で話されている東部方言に基づいて作られた文字である。しかしこの地域には仏教徒が多く、キリスト教徒の人口は全人口から見ればごくわずかであり、現在、カレン州ではこのわずかな人口のキリスト教徒だけがキリスト教ポー・カレン文字を用いている (図 13 参照)。一方、エーヤーワディー川のデルタ地帯に住む西部方言を話すポー・カレンの場合は、イギリス植民地時代以降の民族意識の高まりにともなってキリスト教徒が増え、現在、人口の 3 分の 1 以上はキリスト教徒だと言われている。その結果、キリスト教

ポー・カレン文字は最初に作られたカレン州ではなく、デルタ地帯で使われるようになっていった。現在のビルマでは、キリスト教ポー・カレン文字は「西部ポー・カレンの文字」と呼ばれることが多いほどである。キリスト教ポー・カレン文字は、デルタ地帯のキリスト教徒の間に少なからず普及している。普及の原動力となっているのは、この文字によって書かれた、聖書を始めとするキリスト教関係の刊行物の存在と、教会を中心とする文字普及活動である。デルタ各地の教会が暑期休みなどを利用して講習会を行っている。ただ、デルタ地帯のポー・カレン人口の半分以上を占めると言われる仏教徒ポー・カレン達は、キリスト教布教のために作られたこの文字を学習することに抵抗を持っている。そのため仏教徒でこの文字が読めるポー・カレン人は少ない。

一方、同じく東部方言の話される地域で発生した仏教ポー・カレン文字も、カレン州のポー・カレンの間で徐々に普及してきている。自然発生的な起源を持つ文字であるため、かつては同一の音に対する異綴が多く、なおかつ声調の表記などに不備があったが、1960 年代からパアンに住む有志達が整備を始め、その成果を 1975 年に出版された初等教育用の教科書に盛り込んだ。この文字改革により、綴り字は完璧とは言わぬまでも統一され、声調も正確に表記できるようになった。毎年 4 月の暑期休みにはパアンで百人を超える子供達を集めてこの文字の講習会が行われている (図 14 参照)。また、カレン州の僧院には少年僧にこの文字を教えるところもあり (図 15 参照)、普及の度合いは年々増しているようである。出版物も徐々に増えている。

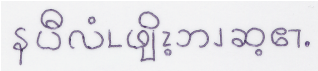
ビルマのカレン州においては、キリスト教ポー・カレン文字と仏教ポー・カレン文字は話者の信仰する宗教によって使い分けがなされている。話者がキリスト教の信者であればキリスト教ポー・カレン文字を用いているし、話者が仏教の信者であれば仏教ポー・カレン文字を用いている。東部方言は 2 種類の文字で書くことができるのである。例えば東部方言の

nə	pɔ̄	lái	phlòʊɴ	bá	chī	ʁâ
あなた	**読む**	**文字**	**カレン**	**正しい**	**(婉曲)**	**か**

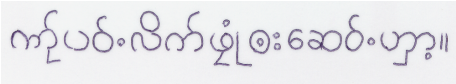
「あなたはカレン文字が読めますか」

という文は、次のようにキリスト教ポー・カレン文字と仏教ポー・カレン文字の両方で書くことができる。

キリスト教ポー・カレン文字での表記:



仏教ポー・カレン文字での表記:



ところが、エーヤーワディー川デルタ地帯においては、キリスト教徒ならばキリスト教ポー・カレン文字を用いているが、仏教徒は自分の言語を書き表す文字を持たない。またタイ側のポー・カレンにおいては、どちらの文字もほとんど普及しておらず、キリスト教徒であろうが仏教徒であろうが、ポー・カレン語を文字に書き表すことができない。まとめると表 2 のとおりである。なぜこのような状況が生じたのだろうか。

表 2　ポー・カレン語を書くときの使用文字

	ビルマ・デルタ地帯	ビルマ・カレン州	タイ側
キリスト教徒	キリスト教ポー・カレン文字	キリスト教ポー・カレン文字	——
仏教徒	——	仏教ポー・カレン文字	——

3.2　ビルマ側の状況

まず、同じビルマ側で、キリスト教ポー・カレン文字はデルタ地帯でもカレン州でも使われているのに、なぜ仏教ポー・カレン文字はカレン州でしか使われていないのかという問題を考えてみたい。

先に述べたとおり、西部方言と東部方言は相互理解が不可能なほど異なっている。ではなぜ、東部方言のために作られたキリスト教ポー・カレン文字を西部方言に移入することができたのだろうか。両方言の相互理解が困難であることの主な原因は、発音が異なることと語彙が異なることである。特に発音が異なることが最も大きな原因になっている。しかし、言語学的に見れば、西部方言と東部方言の音韻対応は非常に規則的であって、一方から一方への予測がある程度可能である。だとすると、文字の体系がひとつひとつの音素に整然と対応するようなものであるならば、理論上は一方の方言を表記したものから一方の方言の発音を導くことができるはずである。キリスト教ポー・カレン文字は、そのような橋渡しとしては非常に

都合の良い体系を有していた。この点を、声調の表記に的をしぼって以下に見ていく。

声調を例にとるのは、両方言の発音の違いの中でも特に声調の違いが意志疎通において非常に大きな障害となっているからである。東部方言では高く発音される音節が逆に西部方言では低く発音され、西部方言で低く発音される音節が東部方言では高く発音されるということが多い。例えば、東部方言の /khá/[k^ha44]「苦い」は高く平らに発音されるが、西部方言の /khà/[k^ha11]「苦い」は低く平らに発音される。ポー・カレン語は声調間対立の機能負担量が比較的高い言語であるため、この違いは決して小さくない。東部方言の開音節に現れる声調は [44] [223] [11] [51] の 4 個である (数字は調値を表す)。一方、西部方言の開音節に現れる声調は [44] [11] [41] の 3 種類であり、両方言の声調は表 3 のように対応する。

表 3　東西方言の声調の対応

東部方言	[44]	[223]	[11]	[51]
西部方言	[11]	[41]	[44]	[11]

最初に仏教ポー・カレン文字で東部方言の上記 4 声調がいかに表記されるかを見てみよう。仏教ポー・カレン文字では、声調の表記の仕方が母音によって異なっている。すなわち、音と表記が一対一で対応していない。表 4 に挙げたのは母音 a と ɔ の場合である。黒丸は字母を表す。

表 4　仏教ポー・カレン文字の声調表記 (母音 a の場合と ɔ の場合)

母音 a の場合

表記				
発音	[-a44]	[-a223]	[-a11]	[-a51]

母音 ɔ の場合

表記				
発音	[-ɔ44]	[-ɔ223]	[-ɔ11]	[-ɔ51]

[-a44] を表す表記と [-ɔ44] を表す表記を比べていただきたい。[-a44] の場合は字母の右側に付いた二つの点 (インド文字学で言うところの visarga) が [44] という

声調を表している。ところが [-ɔ44] の場合は、字母の上と下に付いた記号が、母音 [ɔ] を表すと同時に [44] という声調をも表している。すなわち、ここでは同じ声調でありながら母音によって声調の表記の仕方が異なっている。このように、仏教ポー・カレン文字では、声調と表記が一対一で対応していないのである[*5] 。このことは母音や子音の表記にも言えることである。母音については、表 4 の字形をよく見ていただければ、a の場合も ɔ の場合も、同じ母音でありながら、[44] の場合と他の声調の場合では母音の表記の仕方が異なっていることが分かるだろう。仏教ポー・カレン文字がデルタ地帯には普及していない要因のひとつは、記号が音と一対一で対応していないという複雑さである。

もうひとつ考えておかなければならない要因がある。デルタのポー・カレン仏教徒の中には、この文字を講習会などで熱心に習い、西部方言を書いてみようと試みる者もいる。このとき声調の表記が連想させてしまうビルマ語の発音の問題が障害になることがある。例えば、表 4 で [-a44] を表す表記を見ていただきたい。字母の右側の二つの点は、ビルマ文字の hyegapauk (または witsapauk) とまったく同じ形の記号である。ビルマ文字のこの記号はビルマ語の高く平らな声調[*6] を表す。デルタ地帯のポー・カレン語話者の大部分は、ビルマ語とのバイリンガルである。しかもデルタ地帯は教育水準が高く、カレン人のビルマ文字識字率も高い。ビルマ文字のできるポー・カレン語話者は、hyegapauk で書かれた形式を見れば高く平らな調値を想起するに違いない。ところが、この記号で書かれる東部方言の声調は西部方言の低く平らな声調に対応するので、西部方言の発音で読もうとすると大きな違和感を生じる。逆に、表 4 で [-a11] を表す綴りは低い声調を想起させるであろうが、西部方言では高く読まなければならない。仏教ポー・カレン文字がデルタ地帯に普及しないことには、このことがいくぶんかは影響していると筆者は考えている。以下に見るキリスト教ポー・カレン文字の場合、使われている声調符号は、ビルマ文字などのインド系の文字とは何ら関係のない符号である。したがって、特定の発音を想起させるということがない。

次にキリスト教ポー・カレン文字の声調表記を見てみよう。キリスト教ポー・カレン文字には、東部方言の各声調に一対一で対応する符号があり、字母の右側に置

---

*5 仏教ポー・カレン文字のように、母音によって声調の表し方が異なったり、逆に声調によって母音の表し方が異なるという特徴は、ビルマ文字における母音と声調の表記法にも見られる。仏教ポー・カレン文字はモン文字に由来する文字であるが、おそらく声調表記の仕方においてはビルマ文字の影響を受けたのではないかと考えられる。

*6 文末や休止の前ではゆるやかに下降する。

かれる。開音節に現れる 4 種類の声調は常に表 5 のように表される。仏教ポー・カレン文字のように条件によって声調の表記が異なることは決してない。

表 5　キリスト教ポー・カレン文字の声調符号と東部方言の声調

声調符号	ᛇ	無表記	ᛉ	ᛚ
発音	[44]	[223]	[11]	[51]

先の表 3 と表 5 の対応に基づいて、東部方言を表記したキリスト教ポー・カレン文字から西部方言の声調を導き出すことができる。すなわち表 6 に示すとおりである。仏教ポー・カレン文字と違って声調表記はいかなる条件でも一定なので、不規則な音韻対応を示す形式を除けば、この対応は常に成り立つ。ただし、この文字を

表 6　キリスト教ポー・カレン文字の声調符号と西部方言の声調

声調符号	ᛇ	無表記	ᛉ	ᛚ
発音	[11]	[41]	[44]	[11]

用いて西部方言を表記するとき、西部方言の [11] を表す声調符号が 2 種類あることになる。西部方言の話者達は、東部方言の対応する形式が [44] であるか [51] であるかを見て綴り字を決めている。東部方言の対応する形式が分からない場合や形式そのものがない場合には、表の右端の符号を用いることが多いようだ。

ポー・カレン語の聖書は東部方言で書かれている。デルタ地帯ではこの聖書をそのまま自分達の言葉で書かれた聖書として使用している[*7] 。このような「芸当」ができた理由として、東西方言の音韻対応が規則的であり、また、上で見た声調表記の例がそうであるように、キリスト教ポー・カレン文字が東部方言の音に一対一で対応する体系を持っていたことがある。キリスト教ポー・カレン文字は母音や子音の表記においても記号と音がほぼ一対一で対応している[*8] 。なおかつ、声調符号

[*7] 聖書の中には東部方言特有の語彙や表現がしばしば現れる。西部方言の話者は、これらが方言差に由来することを知らず、文語的な由緒正しい表現と見なしていることが多いようである。

[*8] 実は、西部方言のいくつかの音素対立はキリスト教ポー・カレン文字で書き表すことができない。例えば、au : ɔ や ai : ɛ や ɓ : b など。しかし、ɔ , ɛ , b は出現頻度が比較的低いためか、母語話者は不便を感じていないようである。

は宣教師によって新たに考案されたものであり、ビルマ語の特定の音を想起させるものではない。

以上のように、キリスト教ポー・カレン文字と仏教ポー・カレン文字は、文字体系の違いゆえに、デルタ地帯への普及度に差異を生じることとなった。しかし我々は、そもそもカレン州の方言とデルタの方言の言語体系が異なるという事実に留意する必要がある。仏教ポー・カレン文字がデルタ地帯に普及しない根本的な原因は言語体系の違いなのだ。東西方言の音韻体系をうまくつなぐような特徴を持った文字体系でなければ、一方の文字をそのままもう一方の文字として使用するなどということは不可能である。キリスト教ポー・カレン文字は、運良くそのような特徴を備えており、言語体系の違いという大きな障壁を乗り越えてデルタ地帯に普及したのである。二つの文字のデルタにおける普及の違いには、組織的な布教活動を行っているキリスト教と、そのような活動を行っていない仏教との違いということも影響してはいるだろう。しかし、キリスト教ポー・カレン文字がもっと複雑な体系を有していたならば、布教活動のみではこの障壁を乗り越えることはできなかったに違いない。

もし仏教ポー・カレン文字をキリスト教ポー・カレン文字と同程度に西部方言地域に普及させようとするならば、声調表記などに、もはや同じ文字体系であるとは言えないほどの改変を加える必要があると思われる。しかし、このことは、仏教ポー・カレン文字が体系性に欠けた文字であるということをまったく意味しない。その証拠に、仏教ポー・カレン文字は東部方言の音を余すところなく表記できる。声調の表記が母音によって異なるという点も、記号体系としては余剰的だが、慣れてしまえばこのほうが形態素や単語の認識をすばやく行うことが可能ということもあるだろう。したがって、キリスト教ポー・カレン文字と仏教ポー・カレン文字の普及度の違いについて論じるとき、仏教ポー・カレン文字の複雑さは責められるべきではない。むしろ、キリスト教ポー・カレン文字が言語体系の障壁を乗り越えてデルタ地帯に普及したことのほうが、驚嘆をもって受けとめられるべき事実なのではなかろうか。

3.3 タイ側の状況

表 2 に示したように、タイ側においてはキリスト教ポー・カレン文字も仏教ポー・カレン文字も普及していない。Cooke et al. (1976) は、タイ国 Hot のポー・カレン語を表記するために、タイ文字を用いた表記法を提案している。わざわざ新しい表記法を考案しなければならないというのは、裏を返せば、19 世紀からの歴史を持

つキリスト教ポー・カレン文字と 18 世紀まで歴史を遡れるかもしれない仏教ポー・カレン文字のどちらもが普及していないということを物語る。タイ側のポー・カレン語は、無文字の状態に近いのである。

Cooke et al. (1976) や Phillips (1996,2000) の記述を見ると、タイ側の主要な方言は一般的に、ビルマ側のパアン方言などと同じく東部方言に属すると考えることができる。タイ側の方言とカレン州の方言との間に違いはあるが、カレン州の方言の話者がデルタの方言の話者と会話するときほどの意志疎通の困難は生じないだろう。筆者は、タイ側の方言の話者とポー・カレン語で話した経験を持つカレン州の方言の話者を数人知っているが、彼らの言によれば、タイ語の借用語が頻繁に使われることに戸惑いを感じるものの、意志疎通において支障は生じないという。したがって、パアン周辺の方言の音韻に基づく二つのポー・カレン文字をタイ側のポー・カレン語の表記に適用することはそれほど困難なことではないと思われる。

それにもかかわらず文字が普及していない理由の一つとしては、タイ側のポー・カレン人がビルマ文字の教育を受けていないということがかかわっている可能性が高い。キリスト教ポー・カレン文字にしても、仏教ポー・カレン文字にしても、モン・ビルマ系の文字であることに違いはなく、ビルマ文字を知っていれば、習得の際の労力は少なくて済む。タイ側のポー・カレン人がキリスト教ポー・カレン文字や仏教ポー・カレン文字を習おうとすると、字母を覚える段階でかなりの労力を強いられてしまう。これ以外の理由としては、タイ側のポー・カレン人の生活水準あるいは教育水準が影響している可能性がある。ビルマ側のカレン人に比べて、タイ側のカレン人には近代文明から距離を置いた生活をしている人が比較的多く、文字に対する関心が薄かったのかもしれない。ビルマにおいて仏教ポー・カレン文字がデルタ地帯に普及していないのは言語体系そのものの差異が根本的な理由であると考えられるが、タイにおいてキリスト教ポー・カレン文字や仏教ポー・カレン文字が普及していないのは、カレン州の方言と言語そのものが似ていることを考えると、言語外的な諸事情が原因になっていると結論づけてよい。

4 結び

本稿で論じたことをまとめておく。ポー・カレン語は、言語特徴から見れば、エーヤーワディー川のデルタで話される西部の方言群とカレン州などで話される東部の方言群に大きく二分することができる。視点をかえて文字使用に基準を置けば、東部の方言群はさらに国境をはさんでビルマ側とタイ側に分けることができ、全体として三つのグループに分けることができる。ビルマ側の東西方言を分かつ要

因と、東部方言のビルマ側とタイ側を分かつ要因とは異なっている。ビルマ側の東西方言における使用文字の違いは根本的には言語体系そのものの違いに起因し、同じ東部方言のビルマ側とタイ側の違いは言語外的な条件に起因するのである。このようにポー・カレン語は一つの言語でありながら、文字使用の点では一様ではない特徴を示している。一世紀以上の歴史を持つ文字を 2 種類も有しながら、無文字に近い状態の地域もあるのだ。

最後に問題提起をして終わりたい。無文字状態の言語に言語研究者が表記法を与える必要が生じたとき、どのような選択肢をとるかが大きな問題となり得る。タイ側のポー・カレン語の場合には、キリスト教ポー・カレン文字を選ぶ、仏教ポー・カレン文字を選ぶ、それ以外の文字を作る、という三つの選択肢があり得る。Hot のポー・カレン語の調査を行った Cooke 達は、第三の選択肢を選んだのである。Cooke 達が入った地域は、キリスト教が普及していたようであり、話者の中にはキリスト教スゴー・カレン文字をある程度習得した人がかなりいたという。ならば、新しい表記法を考案する労をとらずにキリスト教ポー・カレン文字を教えるという選択肢もあり得ただろう。そのほうが話者にとっては楽だったかもしれない。キリスト教ポー・カレン文字は、あらゆる点でキリスト教スゴー・カレン文字に似ているからである。どの選択肢をとるかは重要な意味を持ち得る。カレン州のポー・カレンの使用文字が宗教によって分かれていることからも見てとれるように、文字は使用者のアイデンティティーと強く結びついているからだ。ビルマ側で使われている文字と異なる文字を使うことによって、ビルマ側のポー・カレンとの間に心理的な溝を作ってしまうかもしれない。逆に、かえって話者の感覚を磨くことになり、ビルマ側と同じ文字を使うためのきっかけになるかもしれない。未来は予測できない。だが、表記法を選ぶ任務を与えられた言語研究者は、自分がその共同体に大きな影響を与えるかもしれないということを十分に認識した上で、将来を見据えた慎重な判断をするべきであろう。

参考文献

BSPP [ビルマ社会主義計画党] (ed.) (1967) *praN˜ 'thVng'cu_mran'maa_nVng'ngaM tVng':rang':saa: yan˜ 'kye:hmu dha_le.thuM:caM_myaa: ka_rang'* [ビルマ連邦の少数民族の文化と伝統習慣 カレン] (ビルマ語, pp.470).

Cooke, J.R., E. Hudspith and J.A. Morris (1976) Phlong (Pwo Karen of Hot District, Chiang Mai). In: William A. Smally (ed.) *Phonemes and Orthography: Language Planning in Ten Minority Languages of Thailand* (Pacific Linguistics Series C-43), pp.187-220.

Kato, Atsuhiko [加藤昌彦] (1995) The phonological systems of three Pwo Karen dialects. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 18.1:63-103.

加藤昌彦 (1997)「カレン人とその言語」田村克己・根本敬 (編)『暮らしがわかるアジア読本　ビルマ』:42-49. 東京：河出書房新社.

———— (1998)「カレン系言語の文字」新谷忠彦 (編)『黄金の四角地帯』:82-85. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

———— (2000)「カレン」『世界民族事典』:188-189. 弘文堂.

———— (2001a)「キリスト教ポー・カレン文字」『世界文字辞典 (言語学大辞典別巻)』:333-337. 東京:三省堂.

———— (2001b)「仏教ポー・カレン文字」『世界文字辞典 (言語学大辞典別巻)』:847-851. 東京:三省堂.

———— (2002)「ビルマにおける東部および西部ポー・カレン語の対照基礎語彙」『東京外大東南アジア学』7:212-249.

———— (2003)「カレン系言語の状況」崎山理 (編)『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』国立民族学博物館調査報告 39:115-125.

———— (2004)「貝葉が伝える仏教ポー・カレン文字」『ACCU news』344:2-4. 財団法人ユネスコ・アジア文化センター.

（上記拙稿は加藤 (2003) を除いて、
http://www.osaka-gaidai.ac.jp/~burmese/katoe.html
からダウンロード可能。）

Phillips, Audra (1996) Dialect comparison among the Pwo Karen of Central Thailand. *Proceedings of the Fourth International Symposium on Languages and Linguistics* III:1122-1162.

———— (2000) West-Central Thailand Pwo Karen phonology. *33rd ICSTLL Papers*:99-110. Bangkok: Ramkhamhaeng University.

Phon Myint (1975) *bud=dha_bhaa_saa_pV:ka_rang' pe_caa_sa_mVng: (1851-1970).* [仏教ポー・カレンの貝葉の歴史 (1851-1970)] (ビルマ語, pp.306). Rangoon: sa_pre_uu:caa_pe_tVk'

Shintani, Tadahiko L. A. (2003) Classification of Brakaloungic (Karenic) languages in relation to their tonal evolution. Shigeki KAJI (ed.) *Proceedings of the Symposium Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: historical development, phonetics of tone, and descriptive studies*, 37-54. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Solnit, David (1997) *Eastern Kayah Li: grammar, texts, glossary.* Honolulu: University of Hawai'i Press.

藪司郎 (2001a)「スゴー・カレン文字」『世界文字辞典 (言語学大辞典別巻)』:526-531. 東京:三省堂. ———— (2001b)「モン=ビルマ文字」『世界文字辞典 (言語学大辞典別巻)』:1057. 東京:三省堂.

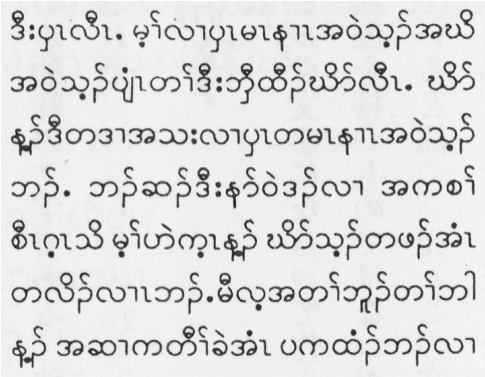

ဒီးပှၤလီၤ. မ့ၢ်လၢပှၤမၤနၢၤအဝဲသ့ဉ်အယိ
အဝဲသ့ဉ်ပျုၤတၢ်ဒီးဘ့ီထိဉ်ယိာ်လီၤ. ယိာ်
နှဉ်ဒီတဒၢအသးလၢပှၤတမၤနၢၤအဝဲသ့ဉ်
ဘဉ်. ဘဉ်ဆဉ်ဒီးနာ်ဝဲဒဉ်လၢ အကစၢ်
စီၤဂ့ၤသိ မ့ၢ်ဟဲက့ၤနှဉ် ယိာ်သ့ဉ်တဖဉ်အံၤ
တလိဉ်လၢၤဘဉ်.မီလ့အတၢ်ဘူဉ်တၢ်ဘါ
နှဉ် အဆၢကတိၢ်ခဲအံၤ ပကထံဉ်ဘဉ်လၢ

図 1　キリスト教スゴー・カレン文字

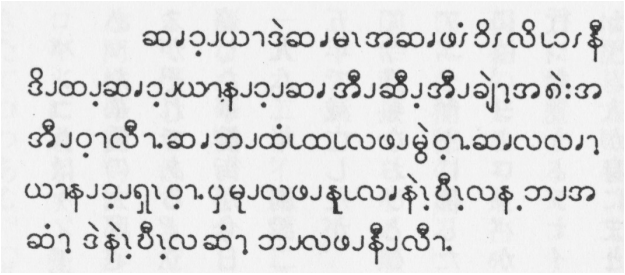

ဆၢဝ့ၢယၢဒဲဆၢမၤအဆၢဖၢ်ဝိၢ်လိၤၢနီ
ဒိၢထ့ၢ်ဆၢဝ့ၢယၢနၢ်ဝ့ၢ်ဆၢ အီၢ်ဆီ့ၢ်အီၢ်ချ့ၢ်အစဲ:အ
အီၢ်ဝ့ၢ်လီၢ.ဆၢ်ဘၢ်ထံၤထၤလၢဖၢ်မ့ဲ့ဝ့ၢ.ဆၢ်လလၢ
ယၢနၢ်ဝ့ၢ်ရ့ၤဝ့ၢ.ပှမ့ၢ်လဖၢ်နူၤလၢ်နဲ့ပီ့ၤ်လန.ဘၢ်အ
ဆံ့ၢ ဒဲနဲ့ပီ့ၤ်လ ဆံ့ၢ ဘၢ်လဖၢ်နီ့ၢ်လီၢ.

図 2　キリスト教ポー・カレン文字 (現行のもの)

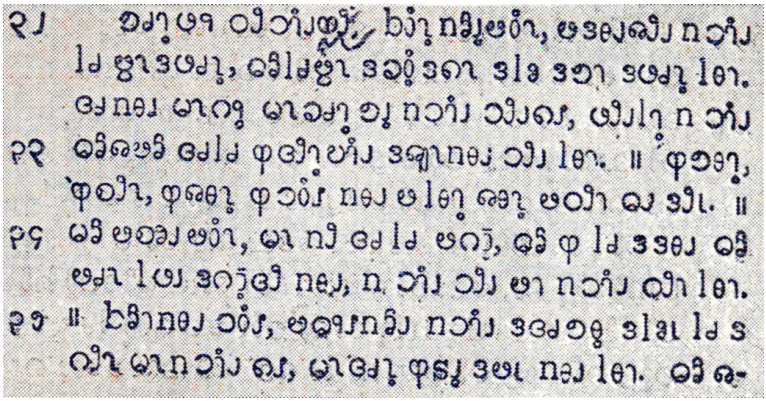


図 3　キリスト教ポー・カレン文字 (Wade が最初に作ったもの。BSPP (ed.) [1967:406] から転載)

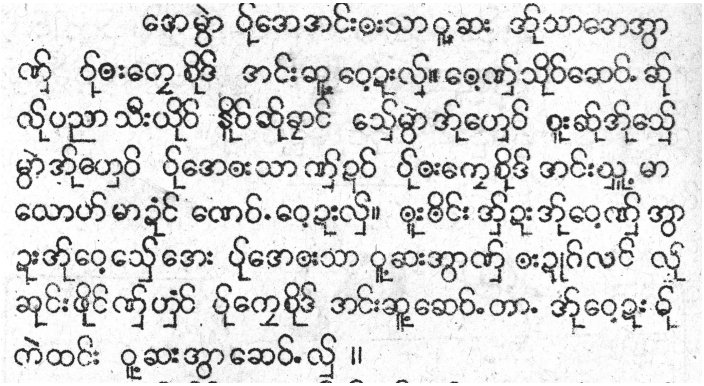


図 4　仏教ポー・カレン文字

図 5　仏教ポー・カレン文字の貝葉

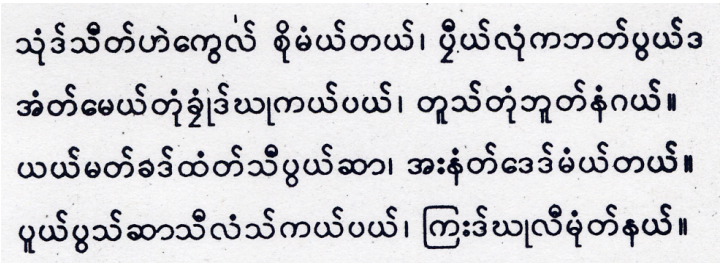


図 6　仏教スゴー・カレン文字

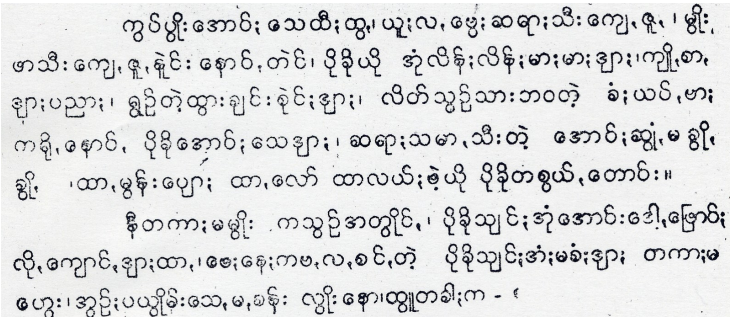
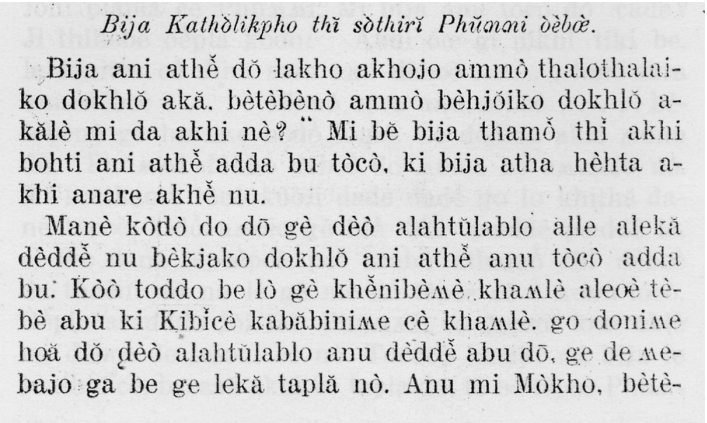


図 7　北方パオ文字

図 8　南方パオ文字



Bija Kathòlikpho thĭ sòthirĭ Phŭmni dèbæ̀.

Bija ani athĕ̀ dŏ lakho akhojo ammò thalothalaiko dokhlŏ akă. bètèbènò ammò bèhjŏiko dokhlŏ akălè mi da akhi nè? " Mi bĕ bija thamŏ̀ thĭ akhi bohti ani athĕ̀ adda bu tòcò, ki bija atha hèhta akhi anare akhĕ̀ nu.

Manè kòdò do dō gè dèò alahtŭlablo alle alekă dèddĕ̀ nu bèkjako dokhlŏ ani athĕ̀ anu tòcò adda bu. Kòò toddo be lò gè khĕ̀nibèmè khamlè aleoè tèbè abu ki Kibĭcè kabăbinime cè khamlè. go donime hoă dŏ dèò alahtŭlablo anu dèddĕ̀ abu dō, ge de mebajo ga be ge lekă taplă nò. Anu mi Mòkho, bètè-

図 9　ゲーバー文字

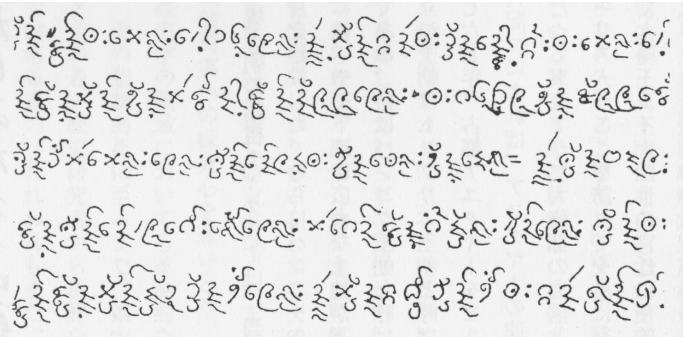


図 10　レーケー文字

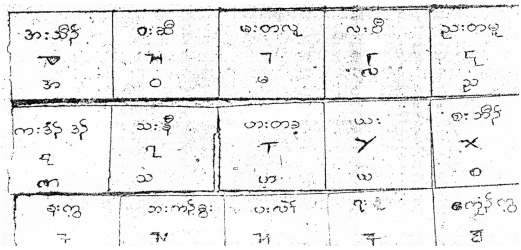


図 11　スゴー・カレン神代文字の字母表 (中段がスゴー・カレン神代文字。上段と下段にはそれぞれキリスト教スゴー・カレン文字で文字の名前と読み方が書いてある)

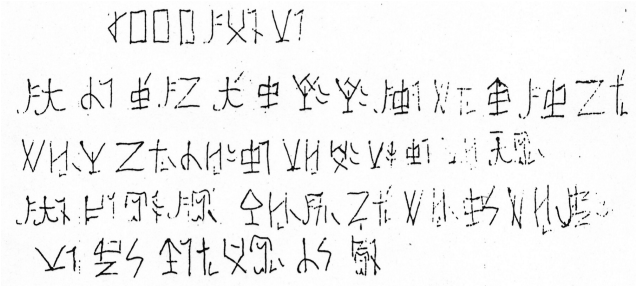


図 12　ミャインジーグー文字

図 13　カレン州のキリスト教徒ポー・カレン村の教会で見かけたキリスト教ポー・カレン文字 (上)。下はビルマ文字。

図 14　暑期休みの仏教ポー・カレン文字講座 (パアンにて)

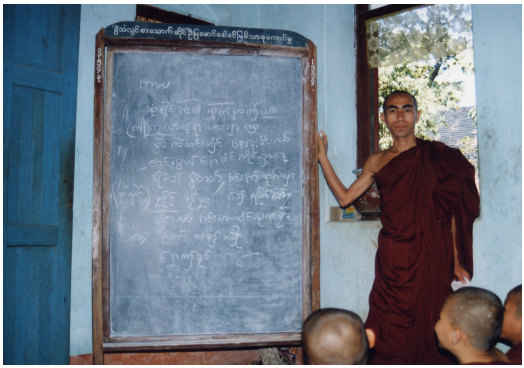


図 15　少年僧達に仏教ポー・カレン文字を教える僧侶